



やなぎっ子

さいたま市立片柳小学校

TEL 048-683-3174

FAX 048-683-8971

<http://katayanagi-e.saitama-city.ed.jp/>

パンドラの箱

校長 萩原 哲哉

自宅から学校への通勤は、東方向への道を進みます。日の出の時刻や方角は、季節によって変わりますが、片柳郵便局前の手押し信号と朝陽とがちょうど重なるのが、大寒の頃。手をかざしても、信号の色が確認できないほどまぶしい朝もあります。「大寒」——一年でもっとも寒さの厳しい時季なのですが、気持ちが前向きになれる頃でもあります。次の二十四節気が「立春」だからです。

今回のコロナ禍をめぐる諸報道の中で、「パンドラの箱を開けてしまった」という表現を、よく耳にします。これは、次のようなギリシア神話に由来する言葉です。

「ゼウスという神様が、パンドーラという女性を地上に送った際に、あらゆる災いが詰まった箱を持たせた。地上に着いた彼女は、好奇心からそれを開けてしまい、中にあった災い（病気、憎しみ、犯罪、争い、怒り、悲しみ、苦しみ、・・）が、世界に飛び出してしまった。」

このことから、触れてはいけない事柄や、深く考える対象にしてはいけない物事のことを「パンドラの箱」と表す言葉が生まれました。

今回のコロナ禍では、これまでには考えられなかったさまざまな事態が起きているわけですので、報道の使い方そのものは誤りではありません。ただ、この語源となったストーリーにはもう少し続きがあります。箱を開けてしまったパンドーラは、慌てて箱のふたを閉めたのですが、その際、箱の底に残ったものがあつたのです。

それは「希望」。あらゆる災いが世界に飛び出してしまったあと、手元に残ったのが「希望」であつたわけです。災いのあとには希望が生まれる、という意味にもとれるでしょうか。（この解釈には諸説ありますが、今は前向きにとらえたいと思います。）

寒い朝は、布団から出ることさえ煩^{わずら}わしく、体も気持ちも沈み縮こまりがちです。それも今が底。底まで落ち込んだらそれ以下はない。あとは上がるだけです。寒さも、気持ちも。

春は、ある日突然やってくるわけではありません。季節はゆっくり訪れます。一年で一番寒い時季を過ごしたあとは、あとは徐々に暖かさに向かう流れだけです。

「私たちは未来からの『挑戦』を受けている」という新聞広告文が目にとまりました。未来の存在を前提として、「今」を考えることの大切さを、改めて感じ入っています。

日の出の方向が移り変わっていくように、時間は休むことなく、確実に進んでいます。

春を待つ気持ちを「希望」と読み替え、コロナに（体も、心も）負けるものか、の気持ちを奮い立たせたいと思います。